

氏名	荒 木 清 典
学 位 の 種 類	医 学 博 士
学 位 授 与 番 号	乙 第 1363 号
学 位 授 与 の 日 付	昭和58年 3 月31日
学 位 授 与 の 要 件	博士の学位論文提出者（学位規則第 5 条第 2 項該当）
学 位 論 文 題 目	ウイルス肝炎における血中免疫複合物の検出とその性状に関する研究 第一編 ウイルス肝炎における血清 C1q 蛋白量とその臨床的意義について 第二編 ウイルス性慢性活動性肝炎の急性増悪時における血中免疫複合物の動態とその性状について
論 文 審 査 委 員	教授 木村郁郎 教授 太田善介 教授 新居志郎

学位論文内容の要旨

ウイルス肝炎における血中免疫複合物（CIC）の動態や性状さらに病因論との関連を知る目的で、ウイルス肝炎患者の CIC を測定し免疫化学的に解析した。ウイルス肝炎では血清中 C1q 蛋白量は CIC 出現の指標となり得ず、むしろ肝組織の線維化の程度と関連した。慢性活動性肝疾患患者血清の C1q 結合活性（C1qBA）は高く、蔗糖密度勾配超遠沈分画で19s以上と以下の二領域に存在し、その活性はほぼ同程度であった。B型と非B型の間および慢性活動性肝疾患と劇症肝炎の間には差はなかったがA型と思われた急性肝炎患者の急性期血清では19s以上の分画の C1qBA が19s以下のそれに比し高かった。B型および非B型の慢性活動性肝疾患の急性増悪では血清の C1qBA は血清 GPT 値の極期の1～5週間前と後で各一度ずつピークに達する二峰性の変化を示した。一例のB型慢性活動性肝炎の急性増悪では C1q に反応する血清成分は SDS-PAGE で5分画に分けられ、急性増悪の経過中その組成には全く変化がなかった。5つの成分のうち2つは HB_s抗原および IgG と同定された。以上より慢性活動性肝疾患の CIC の出現は病態の結果を示すのみならず、急性増悪の発生機構に深く係りをもつものであろうことが示唆された。

論文審査の結果の要旨

本研究はウイルス性肝炎における血中免疫複合物の検出とその性状について臨床的に研究したものであるが、従来十分検討されていなかった血清 C1q 及び血中免疫複合物の動態についてウイルス性肝炎では C1q 蛋白量は免疫複合物出現の指標にはならなかったが肝組織の線維化の程度と関連し、又 C1q 結合活性は活動性慢性肝疾患では高く、急性増悪で二峰性の変化をとりその発生と深い関係を認め、重要な知見として価値ある業績であると認める。

よって、本研究者は医学博士の学位を得る資格があると認める。